

世田谷・勝國寺木造薬師三尊像再考

鈴木 泉

Reconsidering the Yakushi Triad of the Shoukokuji Temple, Setagaya

Izumi SUZUKI

はじめに

東京・世田谷は、室町時代から桃山時代にかけて、武家の名門・世田谷吉良氏⁽¹⁾が領主として居住していた地であり、世田谷御所とも称された本拠の世田谷城は、現在の豪徳寺境内（世田谷区豪徳寺）がその中心とみられている。世田谷吉良氏は、歴代当主が神仏信仰や祖先崇拝の念に篤く、領地内に多くの寺社を建立しているのだが、そのうちの 하나가、世田谷城の東方に近接して所在している勝國寺（世田谷区世田谷）である。この寺の境内に建つ薬師堂には、室町時代の制作とされる木造薬師三尊像が安置されている（図1）。つまりこの像は、世田谷区内に現存する仏像中、数少ない世田谷吉良氏領主時代に造像された貴重かつ重要な作例であり、近年、世田谷区有形文化財にも指定されたところである⁽²⁾。それゆえに、世田谷吉良氏の造寺造仏活動を捉えていくうえで、この薬師三尊像に関する検討は、入念になされる必要があると考える。しかしながら、当寺の創建時期は未だ明確とはいえず、また、薬師三尊像も、その像容や、中尊薬師如来像胎内より検出された、天正20年（1592）の紀年を有す納入文書を本像修理時のものと解すことを主な根拠として、一応室町時代の作としてほぼ落ち着いているが、室町時代の何時頃とすべきかについては、有力な見解が未だ示されていないといってよい⁽³⁾。筆者



図1 薬師三尊像（世田谷・勝國寺）

も、かつて本薬師三尊像の制作時期を室町時代、16世紀の作とする私見を述べたことがあるが⁽⁴⁾、それとて十分な説得力を有す根拠を提示し得ていたわけではない。これは、仏像自体の比較対象が乏しく、様式的判断等が難しいこともあるが、勝國寺の歴史経緯や、それをふまえた造像時期に関する考察を、かなり中途半端で終えてしまっていたことも、大きな要因と理解しているところである。

平成26年度、横浜市歴史博物館で開催された企画展「蒔田の吉良氏」にこの三尊像が出品公開され、多くの来館者にその存在を認知していただく機会に恵まれた。その折、先の不十分な点に対する再検討の必要性を一層感じたことから、最新の研究成果も考慮しつつ、その辺りの考究に主眼を置き、ここにあらためて私見を提示してみたいと思う。

1. 吉良氏の世田谷移住と寺院造営

世田谷吉良氏は、武家屈指の名門・足利氏の支族にあたる吉良氏の支流である。南北朝時代以降、世田谷を中心として主に南武蔵各地に所領を有し、吉良氏支流とはいえ、室町幕府・足利將軍家の親族であり、また、東国にあって当時の武家最上位たる関東公方家に次ぐ高い家格で、一目置かれた特異な存在であった。世田谷吉良氏（以後、吉良氏と記す）は、南北朝時代に貞家が奥州で活発な動きを展開し勢力を拡大したが、その子・治家の時に関東へ戻り鎌倉府に出仕している。世田谷に本拠を構え居住するようになった正確な時期は不明だが、貞治6年（1367）に室町幕府が吉良治家討伐を結城顕朝に命じた文書写しの内容から、この時期にはまだ治家が奥州にいたと解されている⁽⁵⁾。しかし、永和2年（1376）に世田谷郷上弦巻の地（年貢？）半分を治家が鶴岡八幡宮に寄進しており⁽⁶⁾、この時には世田谷に所領を有していたことが明らかで、早ければこの時分かその前後には、世田谷へ移住していた可能性がある。だが、遅くとも満願寺（現・世田谷区等々力）で逆修法要が行われた応永33年（1426）以前の世田谷居住は確実である⁽⁷⁾。世田谷に居を移した最初の当主は治家とみなされているが、異説もあって判然としない⁽⁸⁾。治家以降の吉良氏歴代当主は、数種ある吉良氏系図に若干の異同があるためやや正確性に難があるものの、一応以下の順と考えられている。

—治家—頼治—頼氏—頼高一政忠—成高—頼康（頼貞）—氏朝—

このうち、没年がほぼ確実と考えられるのが政忠（文亀2年・1502）、頼康（永禄4年・1561）、氏朝（慶長8年・1603）である⁽⁹⁾。なお、治家は明德2年（1391）までの生存が確実で、頼治も永徳元年（1381）から応永12年（1405）までの生存が確認できる⁽¹⁰⁾。また、真偽は定かでないが、成高は『新編武蔵風土記稿』（以後、『風土記稿』と記す）の「荏原郡之十 満願寺項」に天文15年（1546）没とある。武家きっての名家であり、系図も諸本伝えられているにもかかわらず、多くの当主が生没年も定かでないというのはいささか意外な印象を受ける。

吉良氏が世田谷移住後、領地内に創建した最初の寺院と思われるのが東岡寺（現・東光寺 目黒区八雲）である。『風土記稿』によれば、当寺は吉良治家が貞治4年（1365）に夭折した子・祖朝の供養を目的に創建したという。貞治4年の創建というのは俄かに信じ難いところだが、治家は世

田谷に移る以前上野国飽間に居住していたともいわれており⁽¹¹⁾、東岡寺の前身寺院が奥州或いは飽間にあり、その由緒を引き継いでいるという可能性も考えられる。その後、本拠である世田谷城近接地を中心に数々の寺院が創建されていくのだが、多くは歴代当主や特定の親族の菩提を弔う目的で建てられたものと考えられる⁽¹²⁾。いまのところ、東岡寺に続く吉良氏による寺院造営としては、応永33年の時点で寺の存在が確認できる満願寺と、勝光院（世田谷区桜）の前身寺院とされる龍鳳寺があげられる。龍鳳寺も創建年を建武2年（1335）とする寺だが、これは三河にもともと所在していたところの寺籍を移した可能性が指摘されている⁽¹³⁾。そして、その後勝國寺（世田谷区）、弘徳院（現・豪徳寺）、泉澤寺（現・川崎市中原区）、さらに蒔田の勝國寺といった寺院が造営されていくことになるのである。おそらく、治家以降の歴代当主は、先代供養の寺院造営を必ず行っていたのではないかと推察するのだが、その辺りについては既に拙稿で論じているところである⁽¹⁴⁾。但し、龍鳳寺を改め勝光院とする事例でもわかるように、必ずしも毎回寺院が新造されるとは限らない。また、当初は小堂一字程度だったものを、後世寺院として拡充整備する例もあると思われ、これらの点は留意しておくべきであろう。なお、14・15世紀の吉良氏による造寺造仏に関しては、いずれ別稿において論じる予定である。

2. 世田谷・勝國寺の歴史再考

世田谷・勝國寺は、山号を青龍山、院号を薬師院と称す真言宗寺院である。『風土記稿』によれば、江戸時代は山号を丸香山と称していたようで、中野・寶泉寺末であった。空襲による被災などもあり、当寺には中世に遡る古文書類がほとんど伝わっておらず、参照すべき文献史料は、専ら江戸時代の『風土記稿』等の地誌や、筆録時期不詳の『勝國寺過去帳』書き入れ⁽¹⁵⁾、寺伝、伝承の類ということになる。筆者自身反省すべき点と心得ているところではあるが、これまで、当寺創建以来の歴史については、これら史資料や寺伝・伝承の類についても十分な検証を怠ってきたという思いを強く持っている。とはいえ、現段階で再度言及するにあたり、有力といえるような新出の史料等があるわけではなく、かなりの部分、推測の域を出ないものとはなろうが、ここ数年発表してきている論考の成果を加味し、従来の見解を整理しつつ既存史資料をあらためて見直すことでも、これまでほとんど言及されてこなかったような、より確実性の高い当寺の歴史的推移が掴めるのではないかと考えている。

さて、そのような事情もあり、勝國寺の創建時期はいまだ不明確なままなのだが、一説に、吉良氏の居館・世田谷城の鬼門除けに薬師如来を安置し、吉良氏代々の祈願所としたのが当寺の起こりとされている⁽¹⁶⁾。親族供養を目的に創建する事例が多い中、勝國寺の場合は、異なる目的であった点は留意しておく必要がある。『風土記稿』に注目すると、そこには、開山を不詳とするものの、吉良義高の祈願所に始まると記している。「義高」という名は吉良系図諸本に見出せないことから、これは音通の近い「頼高」の名を、聞き違いして誤った記録をしてしまったものと想像される。吉良系図からは、「頼高」の孫に当たる「成高」の名も留意されるが、「成高」の可能性はまずないと見てよい。成高は、系図上頼康の父であり、政忠の子にあたる。後述するように、政忠の名も当

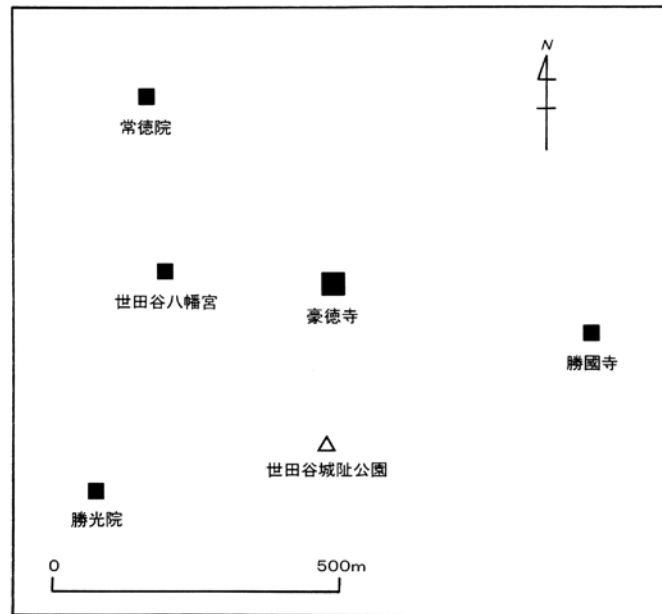


図2 世田谷城周辺社寺位置図

寺の歴史には伝えられており、その子成高を勝國寺の前身である祈願所の建立者とするのはやや無理がある。ここは頼高とみなすのが妥当と考える⁽¹⁷⁾。『風土記稿』の内容を信じる限り、勝國寺がおそらく小堂程度の祈願所から起こったことはほぼ確実と見てよい。そして、その祈願所を建立したのは、吉良頼高である可能性が最も高いという判断は許されるであろう。そうであれば、頼高の生没年は不詳だが、子の政忠が文亀2年没とされることから、祈願所の建立は、15世紀後半までは確実に遡ることになる。しかし、祈願所の建立目的が、伝承等に言う居館の鬼門除けのためという点は疑問である。というのも、鬼門とは艮（丑寅）の方角、即ち北東方向を指すわけで、現在の勝國寺が、祈願所建立の当初より位置が動いていないというのであれば、この見方は当てはまらない。なぜならば、居館の中心はおそらく現在の豪徳寺境内であり、そこからみた場合、勝國寺はほぼ真東かやや南東寄りに位置しているからである（図2）。もっとも、現在の世田谷城址公園からとなれば、確かに艮の方角（北東方向）ということにはなる。つまり、鬼門除けというのは、この城址公園辺りを念頭においた言説ではないかと見られ、かなり後世になって付会された俗説にすぎないものと思われる。繰り返すが、当寺の現在地が祈願所の頃より動いていないのであれば、祈願所、さらにその後身である勝國寺は、当初から東方向を意識して建立されているとみるべきである。そして、この方角に薬師如来を安置するというのは、仏教思想上実に理にかなっており、まさしく信仰に忠実な配置というべきである。すなわち、『薬師瑠璃光如来本願功德経』等によれば、東方の遙か彼方に瑠璃光浄土（浄瑠璃世界）があり、その教主がまさに薬師如来なのである。この点を確実に意識したものであることは間違いない。これは、薬師如来乃至は東方瑠璃光浄土への純粹な信仰心に基づく建立と考えてよいのではないだろうか。吉良氏の神仏信仰といえ、真っ先に鎌倉・光明寺への帰依にみるごとく浄土宗信仰があげられるわけだが、実は薬師如来に対する信仰もかなり篤いものであったことが、稲木吉一氏により指摘されている⁽¹⁸⁾。おそらく、吉良氏の薬師如来に対する信仰も、その具体的な動きが確認できる頼康・氏朝の代から、世代をかなり遡って

連綿と継続されてきたものと思われる。祈願所から始まる勝國寺の歴史は、そのことを如実に示していると言えるのである。阿弥陀の西方極楽浄土だけでなく、薬師の東方瑠璃光浄土に対する信仰の念も強いものがあったわけである。ということは、この勝國寺が前身の祈願所以来寺地の移動はなかったと逆に言えるわけで、しかも、明らかに世田谷城館と密接に結びついた存在であることを証明しているということになる。これはすなわち、祈願所の建立時期のみならず、世田谷城の造営時期の問題にも絡んでくることを認識する必要がある、実に肝心かつ重要なことであると思われる。ともあれ、勝國寺の歴史は、この祈願所に始まることは疑いなく、その時期が15世紀後半まで遡ることは確実である。さらに言えば、世田谷城との強い関連に注目するなら、15世紀前半の建立もあり得ると考える。そして、時の当主は吉良頼高の可能性が高い、という点をまずは押さえておきたい。

次に『勝國寺過去帳』書き入れに注目してみたい。そこには、天文23年（1554）に吉良政忠（頼高の子）が12石を寄進し、この年から弘治2年（1556）にかけて造営費としての人足賃を寄進したと記されているのである。しかし、政忠は文亀2年（1502）が没年とされており、天文から弘治の時期は、吉良頼康（成高の子・政忠の孫）が当主である。したがって、この天文末から弘治にかけての造営が事実とすれば、それは頼康が担った中興事業と見做すのが至当と考える。では、政忠の名がここに出てくるのは何故であろうか。これは、当寺における何らかの造営に関わる大事業が、この中興事業時のことと混同されたからと解するのが、最も頷けるところなのではないだろうか。その造営に関わる大事業が何かといえ、おそらく祈願所から勝國寺という寺院へと拡充整備された事業を指すに相違あるまい。つまり、これは実質的な当寺の創建ということであり、そこに関わっていたのが政忠である、という見方は十分成り立つものとする。要するに、頼康は中興開基であり、政忠こそが当寺開基ということである。すると、勝國寺が祈願所から寺院として整備され実質創建とあいなった時期は、政忠の没年を考慮すれば、文亀2年からそれ以前ということになり、妥当なところで15世紀末頃が想定できようか。そして、前身の祈願所は、当然世田谷城築城（14世紀末から15世紀初め頃）からいささか遅れる時期の建立が推測されることになる。頼高の生年及び吉良家当主であった期間は判然としないわけだが、比較的長命であったと仮定すれば、建立時期を15世紀前半まで遡らせることも可能ではないかと思われるのである。先述のとおり、居館との強い関連が窺えるという点は十分首肯され得るものであり、ゆえに、こうした見方は、決して不当、無謀なものではないだろう。

以上を整理すると、薬師如来を安置する祈願所を頼高が建立し、その祈願所を寺院規模に拡大整備して実質的な勝國寺創建を遂げたのが政忠、そして当寺中興事業を担ったのが頼康、ということになる。勝國寺の関連史資料の記述や伝承の内容をよくよく検討すれば、当寺に関わる吉良氏当主として、上記三人の名が浮上する。その関わりを以上のように解すれば、文献や伝承等の内容に対し一応辻褄は合うこととなり、さして無理なく素直に理解できるものとする。これまでやや曖昧な印象であった勝國寺の歴史も、幾分かはすっきりした流れで捉えられるようになったのではないだろうか。だが、現段階にあってこれはあくまでも一つの可能性に過ぎず、断定できるものではない

い。私なりの一解釈として提示しておきたいと思う。

3. 勝國寺の歴史経緯からみた薬師三尊像の造像時期

次に、既述してきたことをふまえ、現在薬師堂に安置されている木造薬師三尊像について、あらためて見直しておきたいと思う。従来、納入文書を有していたこともあり、中尊の薬師如来像にのみ視線が向けられていたが、平成17年度に実施された解体修理の結果、日光菩薩も薬師如来と同時期・同一仏師の作と判断された（図3）。一方の月光菩薩は現代の補作であり、本稿では触れない。さて、この三尊像最大の懸案は、何と云っても造像時期の問題である。作風や構造、納入文書など、手掛かりはある程度有しているのだが、今のところそれらが決め手とはなり得ておらず、他に有力な史資料、伝聞等もないことから、現時点で問題を解明していく鍵として、当寺の歴史的経緯との照合が重要となる。先の拙稿では、その辺りの考究が不十分であったとの思いが強く、繰り返すが、薬師三尊像に関わる史資料や伝聞などについての再検討も含め、今回勝國寺の歴史的背景に主眼を置いた考察を進め、制作時期の絞り込みを試みようというのである。



図3 日光菩薩立像・正面

この三尊像は、中尊・薬師如来の胎内より天正20年（1592）の紀年を有す文書が検出され（図4）、これが修理時の納入と解されていることから、造像がこの年以前に遡る、すなわち室町時代の作とする有力な根拠となっている。『新修世田谷区史 上巻』などは、解釈をさらに進め、薬師如来像及び納入文書の存在を勝國寺が天文年間に遡る有力な物証とし、『勝國寺過去帳』書入れにある天文23年を当寺創建時期と見做すかのような解釈を示している。これは、暗に薬師如来像が天文頃の造像であることを示唆しているとも受け取れる。但し、納入文書の文中に造像乃至修理を明示する文言は記されておらず、現に造像時の納入とする見方も提示されている⁽¹⁹⁾。なお、この文書から、天正20年の時点で、十二神将を伴う三尊形式であったことが判明する点や、阿快という仏師名が記されている点は特に重要である。十二神将像は今に伝わっていないが、明治5年（1872）

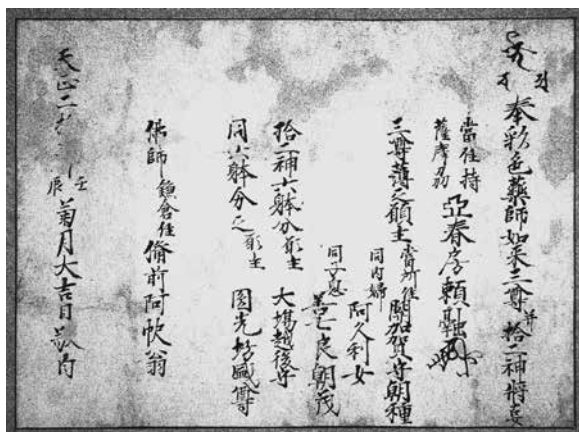


図4 薬師如来胎内納入文書

の『新義真言宗真言律宗本末一派寺院明細帳』勝國寺項の「仏体ノ部」には、「十二神 但厨子入」との記載があり、天正20年当時の十二神将像に該当する像かは定かでないが、十二神将が存在していたことが確認できる⁽²⁰⁾。薬師如来、日光菩薩両像の造形的特徴については、すでに拙稿で詳細に述べているが⁽²¹⁾、ここに要約すれば、まず薬師如来が、胴体に比べ大きめの頭部と、短い首、撫肩でずんぐりとした量感ある体躯で、目尻をやや吊り上げた細目の、意思的だがやや沈鬱な表情



図5 薬師如来立像・正面



図6 同・左側面



図7 同・背面

の面相、低めの肉髻に大振りな螺髪、大らかな衣文表現、省略的な背面の造形等があげられる（図5～7）。構造的には、体部前面や頭部を正中矧ぎとし、割り胸かと思われる点など、やや古様な印象を受ける（図8・9）。一方の日光菩薩は、顔の輪郭や目、耳、鼻の造作に薬師如来との近似性が指摘でき、丸味の強い肩のラインや鷹揚な衣文表現、省略的な背面も薬師如来と共通する（図3）。これらの特徴は大概中世的であるが、鎌倉・南北朝期に遡るほどの古様さは感じられず、やはり室町時代の作と見做すのが穏当である。要は、室町のどの時期に当たるのかである。上述の諸特徴は、ある意味、室町時代のどの時期にも当てはまると言ってよく、ここからの絞り込みは現状困難といわざるを得ない。筆者も、かつて16世紀の制作との私見を示しているが⁽²²⁾、これは、胎内文書の解釈と像の造形的・構造的特徴の理解に基づく判断である。しかし、16世紀のどの辺りに置くかは明言を避けた。それは、断定できるだけの根拠を持ち合わせないために他ならない。特に、階段状に彫り残す独特な内刳の手法や（図9矢印部分）、納入文書にある備前阿快という仏師の存在は、時期判断の重要な決め手となるわけだが、他の比較事例が見当たらない等、判断を下す要因とならなかったことが大きく、その点は残念ながら現時点においても変わっていない。

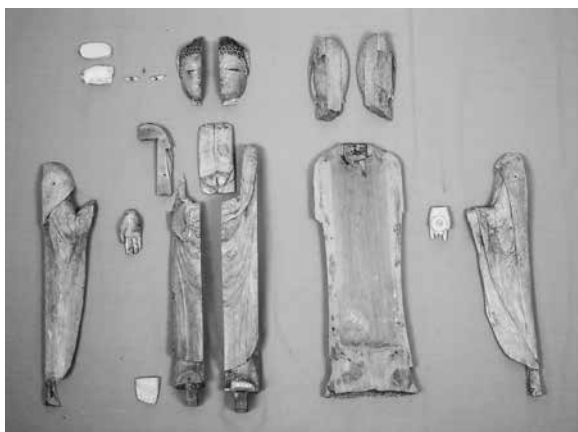


図8 薬師如来・解体状況（1）

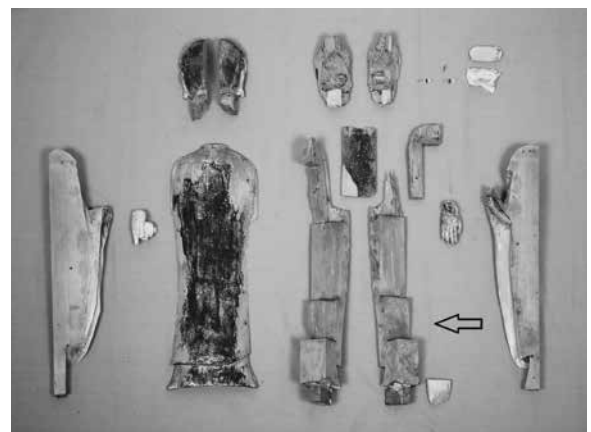


図9 薬師如来・解体状況（2）

さて、これまで述べてきたとおり、勝國寺の重要な画期としては、祈願所として建立された時期と、寺として整備拡張された実質的な創建時期、そして中興時期という三つの時期があげられる。通常、本尊など寺院にとっての主要な仏像については、何らか重要な行事や事業等が行われた時期に、その制作を求めることが一つの捉え方といえる。その意味で、勝國寺にとっての極めて重要な上記三つの画期に、本薬師三尊像の造像時期を当てはめ考えてみることは必要な作業であろう。

ではまず、祈願所に祀られた薬師如来に該当する可能性はどうであろうか。15世紀半ばを前後する時期となるが、この頃の一般的な作例の造形上及び構造上の特徴と照らし合わせれば、この時期の造像を考えても先述したとおりで問題はないと思われる。しかし、現存の薬師三尊像は、天正20年の時点でも薬師三尊として安置されており、しかも十二神将を伴っている。祈願所に祀られた像は、伝承に拠る限り薬師如来とあるのみで、三尊或いは十二神将を伴うことに言及している資料はない。無論、そうしたことを根拠に云々することは軽々にできないが、普通に考えれば、祈願所建立の段階では、単独で薬師如来が祀られていたと解しておくのが妥当なように思われる。

それでは、政忠が関わったと思われる、まさに当寺創建時期たる15世紀末頃という見方はどうであろうか。これも造形的構造的には、この時期を想定してもやはり問題ないといえる。しかし、祈願所建立からまだ半世紀ほどしか経過しておらず、しかもこの場合、由緒ある当初の薬師如来像に代わって新造したということになるわけで、その点を考えると、この時期の造像は通常まずあり得ないものと思われる。よほどの事情が介在していない限り、祈願所に祀られていた薬師如来像が、継続して祀られたとみるべきであろう。

最後に、中興事業がなされた天文末から弘治の時期に造像がなされた可能性を考えてみたい。この場合、まず注意されるのが、納入文書が記す天正20年は、中興事業からこれもわずか40年しか経っていないということである。通常仏像の修復は、特に問題がなければ、まず百年程度は手を入れる必要は生じない。したがって、天正20年に像の修理がなされたのであれば、天文末から弘治という中興事業時期の造像は少々考え難いということになる。しかし、当寺が何らか大きな災禍を被るような一大事があったとすれば、話は別となろう。そこで、世田谷が位置する南武蔵一帯の16世紀前半の政治情勢に目を向けてみると、大永・享禄頃（1521～32）から天文の初め頃にかけては、特に北条氏綱の江戸城奪取（大永4年）以降、同城争奪を主軸とした後北条氏と扇谷上杉氏との衝突が繰り返され、かなり緊迫した状況下にあったことが知られる。江戸城や中世東国経済の一大拠点・品河湊にも近い世田谷の地が平穏無事であったとは考え難く、現に『石川忠総留書』や『続本朝通鑑』等の史料には、享禄3年（1530）に世田谷城落城の記録が認められるのである⁽²³⁾。これが事実を伝えているのであれば、世田谷城周辺も兵禍は免れなかったと思われる。この時、勝國寺も甚大な被害を受けた可能性が高く、薬師如来像も無事では済まなかったことが想定されることとなる。そうであれば、天文末から弘治にかけての勝國寺中興事業とは、この戦災からの復興事業だったのではないかとと思われるのである⁽²⁴⁾。そして、この時、災禍を受けたであろう旧薬師如来像に代わり、新たな薬師像が新造されたのではないかという見方が成り立つ。それが、現存の薬師三尊像というわけである。これは、かなり説得力を有す解釈と思われ、16世紀の造像とみる筆

者にとって、有力な援護となりそうである。

このように、勝國寺の歴史推移に照らし考えてみると、現薬師三尊像は、吉良頼康が支援した天文末から弘治にかけての中興事業時に造像されたと見るのが、最も蓋然性の高い見解だと判断されるのである。そこでいま一つ、この見解の補強になるのではと思われる興味深い事実をここに添えておきたい。それは、薬師如来胎内納入文書の記載内容にある。紀年は天正20年とあるのだが、なぜこの年に薬師三尊像及び十二神将像の修理がなされたのであろうか。文書に注目すると、三尊の「薄之願主」として関加賀守朝種と、彼の夫人（阿久利）、息子（善七朗朝茂）が名を連ねている（図4）。注目されるのは、これとほぼ同じ時期に、吉良氏菩提寺である勝光院に虚空蔵菩薩像と達磨大師像、大権修利菩薩像が寄進されているのだが、そのうちの虚空蔵菩薩に関加賀守、大権修利菩薩には関加賀守夫人が、願主として名を留めているのである⁽²⁵⁾。勝光院は、吉良頼康の菩提を弔うため、養嫡子・氏朝が天正元年（1573）に創建した寺院で、実は文禄2年（1593）が頼康三十三回忌に当たるのである。虚空蔵菩薩は、十三仏信仰において三十三回忌の本尊なのであり、この像が、それに合わせた造像であった可能性が高いことを以前論じたが⁽²⁶⁾、勝國寺の像もその前年に関加賀守を中心に修理がなされているのは、頼康三十三回忌を意識した、乃至はそれに合わせた一連の事業であったとも考えられる。ではなぜ勝國寺像が修理されたかといえ、この像が頼康を本願に造像された仏像であったがゆえなのではないだろうか。つまり、天正20年に修理されたという事実は、暗にこの像が頼康ゆかりの仏像であることを示唆しているようにも思われるのである。勿論推測の域を出るものではないが、この時期、関加賀守等世田谷に土着した吉良旧臣たちの立場は、決して安泰だったわけではなかろう。そのような状況下で、徳川に敵対した元主家のため仏像を造り修理に関わるというのは、余程の覚悟だったと思われる。にもかかわらずそれを実行しているのは、それ相応の理由があるはずで、勝國寺像の場合も、単に像の傷みが酷かったからということで、旧家臣たちが修理に関わるとは思えないのである。その理由こそ、頼康三十三回忌に関連する事業ゆえと考えるのである。

おわりに

以上述べてきたとおり、勝國寺の歴史経緯にのみ着目し、現薬師三尊の造像時期を考えた場合、寺の大きな画期である祈願所の建立時期、寺へと拡充整備された時期、中興時期という三期が有力な候補としてあげられる。このうち、筆者が考える最も可能性の高い時期は、頼康により中興事業がなされた天文末から弘治の頃である。その理由は、享禄3年の世田谷城落城の記録を事実と捉え、そのために城周辺の寺社も多大な損害を受けたに相違なく、勝國寺も例外ではなかったとみなし、この時に薬師如来像も大きな損傷を受けた、或いは灰燼に帰したと考えるからである。そうであれば、頼康の中興事業は戦災からの復興事業であった可能性が高く、そのおり薬師如来も十二神将を伴う三尊として再興された、というのが筆者の見解である。但し、これは歴史経緯のみを考えた場合であり、ここに像自体の造形的、構造的検討、及び、薬師如来の胎内納入文書の検討があらためて加味されることになる。そこで、肝心の造像時期を考えるうえで、特に今後の検討課題として重

要な点は三つあげられる。すでに言及していることではあるが⁽²⁷⁾、再度強調しておきたいと思う。一つは、言うまでもなく作風である。やや癖のある面貌表現と、特に薬師如来に顕著な背面の省略的彫法（とりわけ頭頂から後頭部にかけての独特な彫り残し方）は注意されるべき点であろう（図6・7）。二つ目として、解体修理で判明した薬師如来像の内部仕上げ、すなわち体部前面材下部に見られる階段状に彫り残す内刳の独特な手法で（図9矢印箇所）、こうした工法が仏師個人の特色なのか、工房としての共通的技法なのか、この点、他の近似例などが明らかになってくることで、制作時期がより絞られてくることが予想される。いま一つが、胎内文書に名を残す備前阿快翁という鎌倉仏師の存在である。彼の作例が判明すれば、その如何によって本像の制作時期判断にも大きな影響を与えるからである。それゆえ、現時点で軽々に論じるのは憚られるところもあり、いま少し動向を見定めた慎重な言説が必要なのかもしれない。そのことを重々認識したうえで、あえて私見を述べた次第である。今後、本三尊像の制作時期を検討するに際し、多少とも参考になれば幸いである。

註

- 1) 歴史学分野では、近年武蔵吉良氏の表記が一般的。
- 2) 中尊・薬師如来像が平成12年に、また、脇侍・日光菩薩像が平成18年にそれぞれ世田谷区指定有形文化財となった。なお、月光菩薩像は現代の補作であることから文化財指定は受けていない。平成17年度には解体修理が施されている。
- 3) 従来、薬師如来像の納入文書を修理時のものと解すことから室町時代の仏像とする見方が一般的で、一部の研究者等が納入文書を造像時のものとしている。修理時とみる場合、『過去帳』書入れの天文末から弘治にかけての造営事業を当寺創建とみなし、薬師像もこの頃の造像と考える傾向が強い（『新修世田谷区史 上巻』・1962、など）。詳細は拙稿「世田谷・勝国寺の木造薬師三尊像について」（『世田谷区文化財調査報告集』11所収 世田谷区教育委員会 2001）参照のこと。
- 4) 拙稿「勝国寺・木造薬師三尊像－修理報告と若干の考察－」（『世田谷区文化財調査報告集』16所収 世田谷区教育委員会 2007）
- 5) 『世田谷区史料 第二集』所収（世田谷区 1959）
- 6) 前掲註5書所収。
- 7) 『長弁私案抄』の応永33年（1426）の諷誦文を記した箇所に「世田谷吉良殿逆修時…」とある。前掲註5書所収。
- 8) 例えば『寛政重修諸家譜』は吉良成高の項で「世田谷にうつり住して世田谷の吉良と称す」とし、治家の項では「上野國飽間をあたへらる」と記し、世田谷のことは触れていない。『新訂寛政重修諸家譜 第二』（続群書類従完成会 1964）に拠った。
- 9) 政忠は、豪徳寺と蒔田・勝国寺に石造の墓塔（供養塔）があり、共に文亀2年の紀年が刻まれている。頼康は、石井家本吉良系図等に明記され、氏朝も寛政重修諸家譜等に記されている。前掲註5・8書に拠った。
- 10) 荻野三七彦『吉良氏の研究』（名著出版 1975）
- 11) 多くの吉良氏系図が飽間居住を記している。前掲註5書に拠った。
- 12) 拙稿「十六世紀における世田谷吉良氏の造寺造仏について」（『てら ゆき めぐれ 大橋一章博士古稀記念美術史論集』所収 中央公論美術出版 2013）
- 13) 『勝光院 文化財総合調査報告』第1編歴史（世田谷区教育委員会 1992）

- 14) 前掲註12論文。
- 15) 前掲註5書所収。同書では、解説で近世の書入れとしている。
- 16) 前掲註5書の解説や『新修世田谷区史 上巻』（世田谷区 1962）の勝國寺解説文等にその旨が記されているが、『風土記稿』には吉良義高の祈願所に始まる旨を記すのみである。なお、『風土記稿』は大日本地誌体系版（雄山閣出版 1996）を用いた。その他、『世田谷区社寺史料 第一集』（世田谷区教育委員会 1982）では、薬師如来が小田原北条家から嫁いできた頼康室の持仏であったとの寺伝を紹介している。
- 17) 勝國寺の寺名が政忠の法号に由来しているのであれば、政忠の菩提を弔うため後継の成高が創建した可能性が出てくる。しかし、寺伝類にも成高の名は全く伝えられておらず、政忠供養といった伝聞も伝えられていないことから、その可能性は低いと思われる。勝國寺創建に最も貢献した人物として、顕彰の意味合いでつけられた寺名ではないかと思われる。
- 18) 前掲註13書（「勝光院の彫刻」）。
- 19) 『荏原地域文化財総合調査報告』（東京都教育委員会 1963）
- 20) 『世田谷区寺院台帳』（世田谷区教育委員会 1984）
- 21) 前掲註4論文。
- 22) 前掲註12論文。
- 23) 両史料とも『川崎市史 資料編1』（川崎市 1993）に拠った。
- 24) 前掲註12論文。
- 25) 『過去帳』裏書（前掲註13書所収）。なお、前掲註13書は天正10年頃の造像とみなしている。
- 26) 前掲註12論文。
- 27) 前掲註4論文。

追記

図1・3～9は前掲註4論文より複写転載。

